前未来形のモダールな用法について

渡 邊 淳 也

1．はじめに [1]

本稿は，フランス語の前未来形（futur antérieur）のモダールな用法について考察することを主たる目的とする．前未来形とは，完了をあらわす助動詞（avoir またはêtre）を単純未来形（futur simple）におき，そのあとに本動詞の過去分詞（participe passé）を後続させたものであり，概略的には英語の未来完了形に相当するが，とくにモダールな用法には独特の事例がみられる．

まずは前未来の時制的用法のなかから，代表的な例文をみておこう．

（1） Je ne **me marierai**, dit Colomba, qu'à un homme qui **aura fait** trois choses... （Mérimée, *Colomba*, p.57）

わたしは，三つのことをしてくれたひととしか結婚しないわ，とコロンバは言った．

ここで，faire の前未来形 aura fait は，同一文中に生起している se marier の単純未来形 me marierai によって指示されている未来の時点において，すでに完了しているであろう事態を示すために用いられている．このように，前未来形は，なんらかの未来の基準点をたてておいたうえで，その基準点からみた場合，動詞事行がすでに完了している（すなわち，完了後の結果状態が残存している）ことを示しているのである．

なお，未来の基準点を示す手段は，かならずしも単純未来形などの時制形式でなくてもよい．たとえば，つぎの例では，時間副詞 demain matin が基準点を指示している．

（2） Demain matin les nuages **auront envahi** tout le pays.

（Novakova 2001, p.252）

明朝には，雲が全国を覆いつくしているでしょう．

そして，envahir「占領する」の前未来形 auront envahi は，基準点となる「明朝」に視点をおくなら，そのときにはすでに，雲が全国をすっかり領しおえた状態がみられるであろう，ということを示しているのである．

本稿の次節以降の論述は，つぎのような手順からなっている．まず 2 節で，前未来のさまざまな用法を理解するための基盤となる基本図式を提唱することとする．そして 3 節で，基本図式から出発してモダールな用法を説明してゆくときの，いわば橋渡しとして役立つ，「叙想的時制」の概念を導入する．4 節ではモダールな用法の諸事例を順に検討することにより，基本図式にくわえて，叙想的時制の概念を用いることで，前未来のモダールな諸用法についてうまく説明ができることを確認する．

2 . 前未来形の機能の基本図式

ほかのあらゆる時制と同様に，前未来形についても，時制的用法（emplois temporels），モダールな用法（emploi modaux）といった諸用法のちがいをこえて，一貫して保持していると考えられる基本図式を想定することが可能である．そして，一見したところでは異質な各用法は，時制形式としての基本図式と，文脈的な要因とがあわさった結果出てくるものと考えられる．以下では，前未来形の機能を説明しうる基本図式がどのようなものであるかについて考察しておきたい．

前節でものべたように，前未来形は完了の助動詞の単純未来形と，本動詞の過去分詞をあわせもつ形式であるので，基本的図式についても，それらの要素を組みあわせることによって構築することが妥当であると考えられる．以下で順次，その作業を行なってゆく．

2.1. 完了の助動詞が単純未来形におかれている部分に関しては，渡邊（2013a, pp.78-79）および渡邊（2014 a, pp.137-138）で提唱した，単純未来形の機能についての基本図式が参考になるので，それをふりかってておきたい．

（3） 単純未来形の基本図式

単純未来形におかれた動詞事行を P とすると，P は未来時 t_{+1} に位置づけられる．その際，発話者の視点（point de vue, PDV）も t_{+1} におかれる．

分岐的時間（temps ramifié）[2] による可能世界意味論のモデルにもとづ

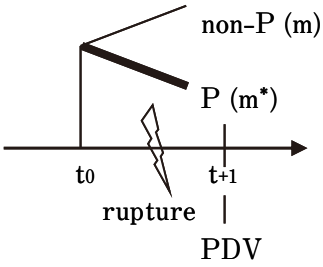
き，単純未来形によって t_{+1} に位置づけられるPは，他の可能世界（monde (s) possible (s)，m）にくらべて相対的に蓋然性が高いとみなされる期待世界（monde des attentes, m*）を構成していると考える[3].

P が分岐的時間のなかでの期待世界を構成するということは，P / non-P の分岐・対立を前提としたうえで，Pが選択されるということである.

その判断は発話者のいる発話時点 t_0 においてなされるが，t_0 と t_{+1} の間には断絶がある.

以上のことを図示すると，つぎの（4）のようになる．ここで，Pとnon-Pへとむかう線のうち，Pにむかう線を太くしているのは，Pが期待世界（m*）であることを示している.

（4） **図：単純未来形の基本図式**



前未来形において，完了の助動詞 avoir または être が単純未来形におかれている意味合いもまた，（3），（4）で示した図式に準拠して説明できる．すなわち，完了をさだめる基準点となる時点が未来時 t_{+1} に位置づけられており，そこに視点がおかれるということ，そして，助動詞によってあらわされる抽象的事行が，分岐的時間における期待世界 m* に位置づけられる，ということである.

2.2. つぎに，過去分詞について考えてみよう．過去分詞の機能は，つぎの（5）のような基本図式でとらえることができると考えられる.

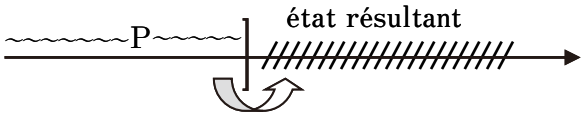
（5） **過去分詞の基本図式**

過去分詞は，過去分詞におかれた動詞の事行 P が完遂された（accompli）

直後からはじまる結果状態（état résultant）への移行をあらわす.

図示すると，下の(6)のようになる．～～～ P ～～～ が過去分詞におかれた動詞がさす事行であり，] がその終端である．過去分詞は下につけた曲線の矢印がしめすように，P そのものから，その終端以降の結果状態への移行をあらわす.

(6) **図：過去分詞の基本図式**



この過去分詞の機能は，付加語的または同格的に名詞にかかる場合にも，助動詞を介して用いられる場合にも，ひとしく認められる機能である.

名詞にかかる例のうち，付加語的な例から検討しよう.

(7) la porte **ouverte**（Wilmet 1997, p.333）開かれた窓

(8) une fille bien **née**（*ad loc.*）良家の娘（直訳：よく生まれた娘）

(7)のように他動詞を過去分詞にして付加語として用いると受動的になり，(8)のように自動詞を過去分詞にして付加語として用いると能動的になるというちがいはあるものの，ouvrir「開く」，naître「生まれる」といった動詞によって指示される事行は完遂され，その終端のあとの結果状態にすでに移行しているということは共通している.

つぎに，同格的な例をみよう.

(9) La femme, **tombée** sur le trottoir, hurlait de douleur.
（Leeman-Bouix 1994, p.26）
その女性は，歩道で転んで，痛みにうめいていた.

(10) Son fils **guéri**, Ève put enfin reprendre son travail.（*ibidem*, p.24）
息子が快癒したので，エーヴはついに仕事を再開できた.

(9)では過去分詞は主語の la femme と同格におかれている．(10)はいわゆ

る絶対分詞（participe absolu）であり，分詞が独自の主語 son fils をもっている．しかし，いずれの場合においても，tomber「転ぶ」，guérir「治る」という動詞が指示する事行の終端をこえて，そのあとの結果状態に移行することを過去分詞が標示しているという点は共通している．

最後に，助動詞 être または avoir のあとにくる場合（受動態および複合時制）を見ておこう．

(11) Je remets de jour en jour à vous écrire. Mais je **suis repris** dans l'engrenage. Mes occupations professionnelles accrues me laissent très peu de loisirs.

(Lettre de Georges Palante à Louis Guilloux du 20 décembre 1918)

あなたにおたよりするのを，1日また1日と先延ばししていましたが，わたしはまた面倒に巻き込まれているのです．職務が増えすぎて，ほとんど自由時間がありません．

(12) **J'ai reçu** un mot de Grenier, carte datée de Fontainebleau. Faites-lui mes amitiés. (Lettre de G. Palante à L. Guilloux du 2 juin 1919)

グルニエくんから短信をいただきました．フォンテーヌブローからさしだされた葉書でした．彼によろしく伝えてください．

(13) Je **suis rentré** dans le calme de ma vie privée et ne me propose pas d'en sortir de sitôt.

(Lettre de G. Palante à L. Guilloux du 25 novembre 1919)

わたしは私生活の静謐のなかに戻ってきたので，そこからすぐには出ようと思いません．

(11)は受動態の文であるが，reprendre「再び取りこむ」という動詞が示す事行が完遂したあとの結果状態に「わたし」がおかれていることを示している．(12)は他動詞の複合過去であるが，recevoir「受けとる」という動詞が示す事行が完遂したあとの結果状態を「わたし」がもっていることを意味している（ここでいう結果状態とは，葉書が手もとにあることだけでなく，連絡に感謝しているなど，たよりを受けとったあとの状態をひろく示すものとする）．(13)は助動詞に être をとるタイプの自動詞の複合過去であるが，やはり，rentrer「帰る」という動詞が示す事行が完遂したあとの結果状態に「わたし」がいることを示している．

いずれの場合も，過去分詞におかれた本動詞が指示する事行が完遂したあとの結果状態に視点がおかれていることが重要である．助動詞 être, avoir はどちらも状態動詞であることから，文全体の意味も状態の標示が中心になる．これらの助動詞が過去分詞とあわさることによって，(5)で示した過去分詞の図式のなかでも，とくに結果状態の部分に重点がかけられることがわかる[4]．

ただし，受動態のなかでも周辺的な事例とされる，状態動詞の受動態に関してはこの限りではない[5]．つぎのような例がそれにあたる．

(14) Elle [＝Psyché] est la plus belle et elle **est aimée** d'Éros.
プスューケーはもっとも美しく，エロースに愛されている．
(P. Auraix-Jonchière et C. Volpilhac-Auge :
Isis, Narcisse, Psyché entre lumières et romantisme, p.371)

このような状態動詞の受動態においては，「結果状態への移行」という過去分詞の基本図式がそのままでは適用できない．なぜなら，状態動詞のあらわす事行は，いかなる境界ももたない，非有界（non-borné）という性質をもつので，通常は終端を越えたあとに想定される結果状態も，想定のしようがないからである．そこで，こうした場合には，助動詞 être によってさし示されるべき「状態」は，本動詞 aimer「愛する」があらわす非有界的状態そのものにならざるを得ない．この事例については，過去分詞が本来もっている機能と，非有界という状態動詞の語彙的性質とのあいだに，相互作用（interaction）[6] が起き，たがいの解釈のあいだで調整がなされた結果，状態動詞のあらわす状態そのものを指示する解釈が生まれてきたといえよう．

2.3. 前未来形も，複合時制という点では，前節でみた(12)，(13)のような複合過去の場合とおなじように，結果残存型の完了[7] をあらわすものと理解することができる．違っているところは，その完了を見切るための基準点が，助動詞の単純未来形によって指定されているということである[8]．

(15) **前未来形の基本図式**

前未来形におかれる本動詞の事行を P とし，助動詞の事行を Q とする．Q は P の結果状態に対応する．

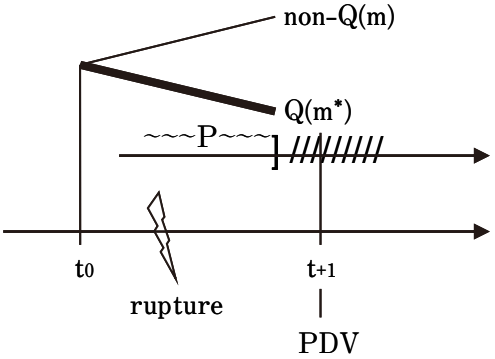
Q は未来時 t_{+1} に位置づけられ，発話者の視点（PDV）も t_{+1} におかれる．Q

は，分岐的時間において，他の可能世界より相対的に卓立された期待世界 m^* を構成する．その性質は，単純未来形における期待世界と同様である．

P は，直接定位されることはなく，その事行が完遂されたあとの結果状態 Q が t_{+1} に位置づけられるという形で，間接的に定位される．

以上のことを視覚化すると，つぎの(16)のようになる．

(16)　**図：前未来形の基本図式**



この基本図式を，時制的用法の実例に即して確認してみよう．

(17)　[＝ (1)] Je ne **me marierai** [R], dit Colomba, qu'à un homme qui **aura** [Q] **fait** [P] trois choses...

動詞 faire の指示する事行を P，助動詞 avoir の指示する事行を Q，そして主節に生起している動詞 se marier の指示する事行を R と記号化すると，R と Q はともに未来時 t_{+1} に位置づけられている．それらの事行は，発話時点から見れば，ともに発話者による一連の想定のなかにあることから，それぞれに期待世界を構成しているといえよう．そして P は，ここでは期待世界からみれば前提条件となる事行にあたる（(17)の内容に即して日常語でいいなおせば，「三つのことをした」という業績を前提条件として保持しているひとと「結婚する」といっているのである）．すなわち，期待世界において，P の結果状態 Q が残存していると想定されているのである．

もうひとつの例を検討しよう．

(18) [＝ (2)] Demain matin les nuages **auront** [Q] **envahi** [P] tout le pays.

前未来形におかれた動詞 envahir の事行を P とすると，副詞句 demain matin によって指定された未来時 t_{+1} に，P が完遂されたあとの結果状態 Q が位置づけられている．日常語で(18)の例に即して言いかえると，明朝にはすでに，雲が全国を領しおえたあとの状態になっているであろうと予期される，ということである．しかし，その結果状態 Q は，あくまでも天気予報における予測であり，期待世界（m^*）である．このように(18)を分析するならば，前未来形の基本図式(15)(16)の構成がそのまま再現されていることがわかる．

最後に，基本図式における視点（PDV）の問題について一言しておきたい．前未来形のみならず，すべての複合時制（すなわち，完了の助動詞を用いるすべての時制）について言える点であるが，複合時制の本質的機能は，完了の助動詞によってあらわされる時点に，動詞事行の結果状態を位置づけることにある．したがって，前未来形においても，発話者の視点は助動詞が指示する未来時におかれることとなる．(16)においても(17)においても，文の時間的主題（thème temporel）[9]になっているのは，未来時 t_{+1} であるので，そこに視点 PDV がおかれることとなる．

3．叙想的時制

前未来形のモダールな用法について考察するまえに，基本図式によって示される時制構造から，モダールな用法にいたる連関をうまく説明しうる重要な概念として，本稿が依拠することになる，叙想的時制（temps *de dicto*）についてここで確認しておきたい．

すでに確認した時制的用法においては，所与の時制におかれた動詞が指示する事行を，直接的に時間軸上に位置づける機能を時制形式が果たしていた．時制形式が動詞事行を直接時間軸上に位置づける役割を果たしているような場合，その時制形式は叙事的時制（temps *de re*）として機能しているということとしよう．すると，前未来形の時制的用法においては，動詞事行が時間軸上に直接位置づけられるというより，その事行の結果状態が時間軸上に位置づけられているではないかという反問が予想される．しかし，前未来形（のみならず，実はすべての複合時制）の時制的用法は，叙事的時制の反例にはならな

い．なぜなら，まさにそのずれを示すためにこそ，本動詞の事行の結果状態を指示することに特化した助動詞が併用されているからである．助動詞のおかれた時制が，その結果状態を直接的に時間軸上に位置づける機能を果たしている（前未来形の基本図式に即していえば，P の結果状態 Q を未来時 t_{+1} に位置づけるということである）のであるから，前未来の時制的用法もまた，叙事的時制の埒内にあるといえる．

それに対して，叙想的時制とは，時制形式が動詞事行を直接時間軸上に位置づけるのではなく，動詞事行を一旦概念的にとらえなおしたもの，さらには，動詞事行を眺望する視点を時間軸上に位置づける場合のことをいう．ここでは，モデルケースとして，前未来形に隣接する時制である単純未来形の事例をみておくこととする．

まず，叙事的時制に属すると考えられる典型的な例をみよう．

(19)　Le chantier de la Nouvelle Gare sent fortement le bois humide : demain il **pleuvra** sur Bouville.（Sartre, *La nausée*, p.248）
新駅の建設現場から，ぬれた木材のにおいが強くする．明日，ブーヴィルには雨が降るだろう．

この例では，pleuvoir「雨が降る」という動詞によって指示される事行を，直接的に，demain「明日」という未来時（の期待世界）に位置づけるために単純未来形が用いられている．この直接性が，叙事的時制の概念に対応している．

つづいて，本稿では叙想的時制の事例とみなすことになる文例をみよう．

(20)　Pour qui a-t-on sonné la cloche des morts ? Ah ! mon Dieu, ce **sera** pour M^{me} Rousseau.
（Proust, *À la recherche du temps perdu*, cité dans Touratier 1996, p.178）
だれのために死者の鐘がなったのかしら ? あっ，まあ，ルソー夫人のためでしょうね !

これは，単純未来形のモダールな用法の代表格とされる，いわゆる現在推量用法である．判断対象となる命題を明示するならば，

(21)　C'est pour M^{me} Rousseau qu'on **a sonné** la cloche des morts.

死者の鐘が鳴らされたのはルソー夫人のためである.

ということになるが，このなかに，on a sonné という複合過去形があることからわかるように，叙事的なレヴェルでの事行の位置づけは過去時，または on a sonné の結果状態に対応する現在時であり，単純未来形の基本的時間性とみなされている未来時への位置づけとは相いれない．しかしこれは，あくまでも叙事的次元であることに留意しなければならない.

一方，単純未来形の現在推量用法を未来時と関連づけることは可能である．その際，もっとも伝統的になされてきた説明は，Damourette et Pichon（1911 − 1936, tome 5, p.388）による，「未来時における確認」（vérification future）というものであろう．« il y aura un moment où, sorti de doute, on pourra dire... »（「疑いから脱して，...のように言えるときが来るだろう」）という言いかえにみられるように，なんらかの未来時に確認可能になるであろう内容を，暫定的に推量している，という考え方である.

ここでいう「確認可能」の内実など，詳細については，渡邊（2014 a），(2014 d）をさらに参照していただきたいが，本稿では，概略的には「未来時における確認」という伝統的説明を踏襲することとする．しかし，この説明は，本稿の主張する叙想的次元を介在させることにほかならないことを強調しておきたい．(21)でみたように，叙事的次元では現在に位置づけられることであるが，叙想的次元では，問題となる事態についていっそう明らかになるであろうと想定される，漠たる未来時の期待世界への位置づけがなされているのである．このように，叙事的次元と叙想的次元を分けることによって，時制構造からモダールな用法にいたる連関をうまく説明することができるのである.

4 . 前未来形のモダールな用法

前未来形のモダールな用法としては，推量用法，まとめの用法，憤慨用法を認めることができる．以下，4.1 節から 4.3 節で，それら 3 つの用法について，本稿の依拠する基本図式と叙想的時制の概念を用いて順次検討してゆくこととする.

4.1. 推量の前未来形（futur antérieur conjectural）

前未来形の推量用法としては，たとえばつぎのような例をあげることができる．

(22)　Il est tard. M. Res **aura quitté** le magasin.
（Mandiargues, *Motocyclette*, p.157）
遅い時間だ．レスさんは店を出ているだろう．

この用法は，判断対象の命題が完了的にとらえられるという点だけが単純未来形とちがっていて，それ以外は(20)でみた単純未来形の現在推量用法と同様の説明が可能である．すなわち，叙事的な次元では，つぎのような，複合過去形であらわすことのできる時間関係（発話時点における完了，すなわち結果状態の残存）が問題になっている．

(23)　M. Res **a quitté** le magasin.
レスさんは（すでに）店を出ている．

しかし，叙想的な次元で，叙述内容に関する確認を未来時の期待世界に位置づけている（すなわち，確認が未来時に持ちこされている）ことから，複合過去形から前未来形へと時制が変わった結果が(22)の文である．

なお，単純未来形の現在推量用法は，渡邊（2013 a）（2014 a）（2014 d）でのべたように，現代の標準的なフランス語では衰退してきていることが知られているが，前未来形のこの用法については，標準的なフランス語でも，単純未来形の現在推量用法ほどは使用がかぎられていない．新聞や雑誌，さらに放送でも用いられる．たとえば，つぎの例はテレビのニュースでのキャスターの発言からとられた例である．

(24)　Vous l'**aurez constaté** c'est l'été indien en France.
（*La Chaîne Info,* cité dans Barceló et Bres 2006, p.120）
確かめられたことでしょうが，フランスは小春日和です．

テレビでは，このように，視聴者によびかけるかたちで前未来形の推量用法が用いられることが多い．ここでは，ニュースキャスターと視聴者とのあいだで，擬似的な対話が成りたっており，視聴者がこのあと「小春日和だ」と言い

そうだと思っていることをキャスターは表明しているのである．このことを，発言動詞をおぎなった言いかえで示すならば，つぎ(25)のようになる．

(25) Vous **direz** que vous l'avez constaté c'est l'été indien en France.
確かめられたとおっしゃるでしょうが，フランスは小春日和です.

したがって，叙事的な次元では，

(26) Vous l'**avez constaté** c'est l'été indien en France.
確かめられたように，フランスは小春日和です.

と複合過去形で言いあらわせるような，発話時点における完了が問題になっているのであるが，擬似対話における対話者たる視聴者がそのあと同趣旨の発言をしそうであるという叙想的な次元での未来性が前未来形に反映しているのである．

実は，この種の前未来形は，言語学などの論文にもよく出てくる．

(27) Il faut, on l'**aura compris**, identifier des mécanismes régulateurs.
(Larrivée et Lagorgette 2005, p.175)
おわかりになったことだろうが，調整のしくみを突きとめなければならない.

この例でもまた，(24)でキャスターが視聴者によびかけていたのと同様に，論文筆者が読者によびかけているのである．そしてここでも，これまでに見てきた例と同様に，叙事的なレヴェルでは，

(28) Il faut, on l'**a compris**, identifier des mécanismes régulateurs.
おわかりになったとおり，調整のしくみを突きとめなければならない.

のように複合過去形で言いあらわせるような内容が，叙想的に未来時に転移させられた結果，前未来形が用いられているといえる．

前未来形のふたつの形態的特徴，すなわち本動詞の過去分詞を用いるということと，完了の助動詞が単純未来形におかれていることに分けて考えると，前者は叙事的次元での完了をあらわし，後者は叙想的次元での視点の未来性をあ

らわすというように，ことなる次元で役割分担をしていることがわかる．とくに後者のレヴェルは，モダールな用法に独特の視点のずらしであり，後論を先どりしていうと，この役割分担は，これから見てゆく前未来形のほかのモダールな用法にも共通している．

4.2. まとめの前未来形（futur antérieur de bilan）

「まとめの用法」とよばれる用法は，おなじ未来時制でも，単純未来形にはみられず，前未来形に特有であると思われる．つぎのような例がそれにあたる．

(29)　L'embrouille n'**aura** pas **survécu** au week-end. Après son « non sauf si » et les quatre conditions posées à Jacques Chirac pour dire oui au traité constitutionnel européen, Laurent Fabius, numéro deux du Parti socialiste, a hier soir clairement dit non à la Constitution européenne. (*Libération*, le 13 septembre 2004, cité dans Barceló et Bres 2006, p.118)
混乱は週末を超えなかったことになるだろう．ヨーロッパ連合の憲法に対して，「条件つきの反対」と，賛成のための 4 条件をジャック・シラク [大統領] に伝えたあとで，社会党のナンバー 2 のローラン・ファビユスは，昨夜，はっきりとヨーロッパの憲法に反対を表明した．

この文は週明けの月曜の新聞に載っていたものである．あとの文に出ているような，ファビユス氏の態度の変化を短くまとめるならば，前未来形のあらわれる文のような内容になる．この文も，叙事的な時間関係だけでいうなら，つぎのように，発話時点における完了をあらわす複合過去で言いかえられる．

(30)　L'embrouille n'**a** pas **survécu** au week-end.
混乱は週末を超えなかった．

(29)において，これにつけ加わっている叙想的次元は，起きてきたさまざまなできごとを総括するのに適切であると思われる未来時の期待世界に仮構的に視点をおき，そこから回顧的にながめるならば，このようなまとめをすることになる，ということである．

ここで，「いま現に総括できているのに，なぜわざわざ未来時に視点をおく

のか」という疑問があるかもしれない．それについては，たとえば（29）に即していうと，週が明けたばかりの現在よりも，ファビユス氏のさらに詳細な発言や，他の政治家との議論などが確認できるであろう未来時のほうが，「混乱」の帰趨について総括するためにいっそう適切でありうる．仮構的に未来時の期待世界に視点を移動することによって，総括としてのべられる内容の確度を上げるような意味効果があるといえよう．

この点の論拠として，さらに，つぎのような例をあげることができる．

（31） L'ironie de l'histoire **retiendra** que le même homme, le général Moucharraf, **aura été**, successivement, l'acteur principal de l'intensification de cette politique régionale puis de sa remise en cause.
（Chr. Jaffrelot *et alii, Le Pakistan, carrefour de tensions régionales,* p.129）
ムシャラフ将軍というおなじ人物が，この地域政策を強化しておいて，のちには疑問視する中心人物になったということを，歴史の皮肉は銘記するだろう．

この例においても，総括の内容をすでにのべることができているという意味では，その総括を現在時に位置づけることも可能なのであるが，それは叙事的次元に引きずられた解釈であろう．その内容を que... ではじまる補足節としてみちびく，« L'ironie de l'histoire retiendra »（「歴史の皮肉は銘記するだろう」）という主節の動詞が単純未来形におかれている意味は，まさしく，さらに広い観点からの評価が可能になるであろう未来時の期待世界を指示するためである．この未来時こそ，まとめの前未来形aura été の視点の未来性に対応しているのである[10].

4.3. 憤慨の前未来形（futur antérieur d'indignation）

憤慨の前未来形とは，つぎの例文にみられるような用法である．

（32） J'**aurai donné** à cette maison les trente plus belles années de ma vie pour en venir à ce résultat de me faire dire : « Prenez la porte ».
（Courteline, *Messieurs les ronds-de-cuir*, cité dans Imbs 1960, p.111）
「出ていけ」といわれる，こんな結果にいたりつくために，この家にわたしの人生のもっとも美しい 30 年間を捧げたのか！

この用法もまた，叙事的にはすでに成立した事態について言及しており，つぎの(33)のように，完了をあらわす複合過去形で言いかえることができる．そのことは，前未来形が複合時制（助動詞を用いる完了時制）であることに反映されている．

(33)　J'**ai donné** à cette maison les trente plus belles années de ma vie pour en venir à ce résultat de me faire dire : « Prenez la porte ».
「出ていけ」といわれる，こんな結果にいたりつくために，この家にわたしの人生のもっとも美しい 30 年間を捧げたのだ．

一方，未来時制であるという点は叙想性にかかわっており，擬制的に未来時に視点をおく機能をはたしていることになる．Imbs（1960）が，（32）の言いかえとして，

(34)　Je m'indigne à la pensée que je **devrai me dire** un jour : « j'ai donné... »
（*ibidem*, p.111）
いつの日か，「...」と思わなければならなくなるだろう，という考えにわたしは憤慨する．

という文を提案していることからもわかるように，擬制的に未来時の期待世界に視点をおいて，そこから叙述内容を回顧的にとらえかえし，発話者みずからが行なうと想定される潜在的発言，あるいは，発話者みずからがいだくと想定される想念を，その未来時に位置づけているのである．これこそが，憤慨の前未来形の叙想的次元であるといえよう．

5．おわりに

以上，本稿では，前未来形のモダールな諸用法について，前未来形の基本図式にくわえて，叙想的時制の概念を用いることにより，前未来形の時制的用法と同様の扱いのもとに，統一的に理解できることを示してきた．

前未来形の基本図式は，(i) 助動詞のおかれる時制である単純未来形が標示する期待世界に，(ii) 過去分詞によって指示される事行の結果状態を位置づける，というものであった．

このうち，(i) については，推量内容の確認や，なんらかの総括（まとめや憤慨の対象となる事態をとらえること）をするために，発話時点よりいっそう適切と考えられる未来時に視点をおくことが，前未来形のモダールな 3 用法のすべてに共通していた．この点がモダールな用法の叙想性に対応しているのである．

(ii) の特徴は，複合過去，大過去など，他の複合時制とも基本的には共通しているものと考えられるが，本稿の射程から大きく外れるため，今回は正面から論じることができなかった[11]．この点をはじめとして，関連する諸問題については，また機会をあらためて論じたい．

註

1 この論文は，2012 年度～2014 年度科学研究費助成基金 基盤研究（C）課題番号 24520530「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」（研究代表者：和田尚明），および 2013 年度～2014 年度科学研究費助成基金 基盤研究（C）課題番号 25370422「フランス語および日本語におけるモダリティの発展的研究」（研究代表者：渡邊淳也）の助成をうけて行なわれた研究の成果の一部である．査読委員として有益なコメントをくださった和田尚明さんに感謝を申し添えたい．

2 分岐的時間とは，時間の進展につれて，さまざまに異なる可能世界 へと枝わかれする形で想定される時間の表象であり，われわれが時間の流れを形象化する方法のうちのひとつである．詳細は渡邊（2008）ならびに渡邊（2014 a）の第 4 章を参照．なお，分岐的時間，可能世界，期待世界の概念は，論理学・哲学に淵源があるが，言語学的には Martin（1983）ではじめて明示的に規定された体系に準拠している．

3 したがって，期待世界も可能世界のうちの一特殊ケースである．ここでいう可能世界と期待世界は，後者が前者の一特殊ケースであることをふくめて，それぞれ，Langacker（1991, pp.277-281）が will と may の記述に用いている Potential Reality と Projected Reality に類似する概念である．

4 本論文では，(12)，(13) のような複合過去形について本格的に議論をする余裕はないが，一般に，複合過去形については，（どの程度結果的な解釈と扱うかに差があるものの）残存する結果状態に主眼がある「完了」解釈と，過去に動詞事行を位置づけることに主眼がある「過去」解釈のふたつがあるとされることが多い．実際，つぎのような例においては，

(i) Il **est parti** chercher des cigarettes.

En fait, il **est parti.**　（S. Gainsbourg, *Nicotine*）
彼はたばこを買いに行ったの
でも本当は，出て行ってしまったの

複合過去 il est parti の「たばこを買いに行った」という「過去」解釈と「出て行ってしまった」という「完了」解釈との両義性をたくみに使って言いなおしをしているように思われる．しかしながら，「過去」解釈も，partir「出発する」という動詞のあらわす事行は果たされ，結果状態に移行しているからこそ可能なものであり，助動詞と過去分詞によって与えられる同じ図式の，どの部分に視点をおくかという相違から説明がつくという見とおしをもっている．

5　本稿は過去分詞の研究を直接の目的としていないので，周辺的事例としては，ここで言及する状態動詞の受動態にしか言及する余裕がないが，こうした事例については，それぞれに周辺的であるといえる理由があり，例外的な場合として処理できると考えている．過去分詞，ならびに受動態全般については，Gaatone（1998）を参照．

6　ここでいう「相互作用」は，Barceló et Bres（2006, pp.19-21）の用語であり，ある形態素のあらわす指令（instructions）と，他の形態素の指令とのあいだに，なんらかの不調和（discordance）がある場合，たがいの指令のなかで相いれない部分を修正するかたちで全体の解釈がきまってくる，というものである．なお，状態動詞の受動態については，英語の事例を分析している和田（2006, pp.108-110）が，動詞の語彙的意味による「事象構造」と，過去分詞，助動詞のおかれた時制による「時制構造」とのあいだの関係によって解釈がきまってくるという図式化をしている．フランス語の事例についても，その解釈過程は和田（2006）によって示されたものと基本的には同様であると考えられる．

7　「結果残存型完了」とは，Guillaume（1929, p.23）およびBarceló et Bres（2006, p.13）のいう aspect extensif，Comrie（1976, p.56）のいう perfect，Novakova（2001, p.218）のいう aspect accompli に相当する．前未来形の時制的用法をもっぱら論じた住井（1994）も，Desclés（1980）のトポロジー的モデルを援用して，「以前の事行の結果事行である補集合」（住井 1994, p.19）が問題になっているとしており，本稿でいう結果残存型完了に対応する．

8　このように，前未来形の基本図式には構成性原理（principe de compositionnalité）が貫徹されている．このことは，発話時点を基準とし，ヨーロッパ諸語では定形動詞によってあらわされる絶対時制部門と，任意の時点を基準とすることができ，ヨーロッパ諸語では非定形動詞によってあらわされる相対時制部門の組みあわせによって時制の機能をとらえようとする Wada（2001）の Compositional Tense Theory の基本発想と接続可能である．

9　Ducrot（1979）の用語．

10 佐藤（1994）は，「発話者の個人的評価を示す前未来」と名づける用法を前未来形にみとめ，詳細に分析している．beaucoup（「多く」），longtemps（「長らく」）などの程度表現が多く共起するという観察をしており，たとえばつぎのような例がとりあげられている．

(i) Il y **aura** beaucoup **plu** aujourd'hui ! きょうはたくさん雨がふったなあ！

ここでは詳説する余裕はないが，「個人的評価を示す」用法も，「まとめの用法」のなかに下位区分としてふくめることができると考えている．(i) のような例も，前未来形の使用自体は，本稿での「まとめの用法」に関する説明をそのまま適用することで理解できる．程度表現などの評価をあらわす表現が「まとめの用法」のなかでとりわけ目立っているのは，わざわざまとめをするに足るほどの重要な事実であるということが，高い程度などの重大な叙述内容と結びつきやすいということではなかろうか．佐藤（1994）の研究対象には本稿の (29) のような例はふくまれていないが，(29) は，「混乱が週明けに持ちこされるかと思いきや，実にあっけなく終わった」というように意外性をともなった解釈をすることもでき，そうすると「個人的評価を示す」用法に近づいてくる．

11 複合時制全般については，Fleischman（1983），Wada（2001），和田（2010），藤田（2003），田中（2006）を参照．

参考文献

Álvarez Castro, C.（2007）: « Interprétation du futur du l'indicatif et représentation d'événements futurs », *Cahiers Chronos*, 19, pp.7-24.

Anderson, E. W.（1979）: « The Development of the Romance Future Tense », *Papers in Romance*, 1, pp.21-35.

Anscombre, J.-Cl.（1992）: « Imparfait et passé composé : des forts en thème / propos », *L'Information Grammaticale*, 55, pp.43-53.

青木三郎（1998）:「現代フランス語の単純未来形の「多変性」について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）34, pp.115-133.

Aoki, S. et I. Tamba（2000）: « Avenir, anticipation et catégorie linguistique du futur », *SCOLIA*（*Sciences Cognitives, Linguistique et Intelligence Artificielle*）, 12, pp.25-37.

Barceló, G. J.（2004 a）: « Guillaume et le futur roman : à propos du futur périphrastique », *Modèles linguistiques*, 25, 1-2, pp.169-178.

Barceló, G. J.（2004 b）: « L'occitan e lo catalan : doas lengas bessonas ? Un futur compromotent », *Linguistica occitana*, 1, pp.1-12.

Barceló, G. J.（2004 c）: « Lo(s) futur(s) occitan(s) e la modalitat : elements d'estudi semantic comparatiu », *Linguistica occitana*, 2, pp.1-10.

Barceló, G. J. et J. Bres（2006）: *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.

Bourova, V. et L. Tasmowski（2007）: « La préhistoire des futurs romans », *Cahiers Chronos*, 19, pp.25-41.

Caudal, O.（2012）: « Relations entre temps, aspect, modalité et évidentialité dans le système du français », *Langue française*, 173, pp.115-129.
Celle, A.（1997）: *Etude contrastive du futur en français et ses réalisations en anglais*, Ophrys.
Celle, A.（2006）: *Temps et modalité*, Lang.
Comrie, B.（1976）: *Aspect*, Cambridge University Press.
Confais, J.-P.（1990）: *Temps, mode, aspect*, Presses Universitaires du Mirail.
Curat, H.（1991）: *Morphologie verbale et référence temporelle en français moderne,* Droz.
Damourette, J. et E. Pichon（1911-36）: *Des mots à la pensée*, 9 vols, d'Artrey.
Dahl, Ö（éd.）(2000）: *Tense and aspect in languages of Europe*, Mouton de Gruyter.
Dendale, P.（2001）: « Le futur conjectural versus *devoir* épistémique », *Le français moderne*, 69, 1, pp.1-20.
Desclés, J.-P.（1980）: « Mathématisation des concepts linguistiques », *Modèles linguistiques*, 2, 1, pp.21-56.
Desclés, J.-P.（1995）: « Les référentiels temporels pour les temps linguistiques », *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
Ducrot O.（1979）: « L'imparfait en français », *Linguistische Berichte,* 60, pp.1-23.
Enç, M.（1996）: « Tense and Modality », Sh. Lappin（éd.）: *The handbook of contemporary semantic theory*, Blackwell, pp.345-358.
Fleischman, S.（1982）: *The future in thought and language,* Cambridge University Press.
Fleischman, S.（1983）: « From pragmatics to grammar », *Lingua,* 60, pp.183-214.
Franckel, J.-J.（1984）: « « Futur « simple » et futur « proche » », *Le français dans le monde,* 182, pp.65-70.
藤田健（2003）:「完了アスペクトの文法への体系化に関する類型論的考察」『フランス研究』（北海道大学）4, pp.49-91.
Gosselin, L.（1996）: *Sémantique de la temporalité en français,* Duculot.
Gosselin, L.（2010）: « Les relations entre périphrases aspectuelles et conjugaison en français », N. Flaux et alii（éds.）: *Interpréter les temps verbaux*, Lang, pp.33-61.
Grevisse, M.（1993[13]）: *Le bon usage,* Duculot.
Guillaume, G.（1929）: *Temps et verbe,* Honoré Champion.
Helland, H. P.（1995）: « Futur simple et futur périphrastique », *Revue Romane,* 30, 1, pp.3-26.
Huddleston, R.（1995）: « A case against a future tense in English », *Studies in languages*, 19, 2, pp.399-446.
Imbs, P.（1960）: *L'emploi des temps verbaux en français moderne,* Klincksieck.
井元秀剛（2010）:『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.
Jeanjean, C.（1988）: « Futur simple et futur périphrastique en français parlé », Cl. Blanche-Benveniste *et alii*（éds.）: *Grammaire et histoire de la grammaire : hommage à la mémoire de Jean Stéfanini,* Publication de l'Université de Provence, pp.235-257.
Laca, B.（2004）: « Les catégories aspectuelles à expression périphrastique : une

interprétation des apparentes « lacunes » du français », *Langue française,* 141, pp.85-98.
Langacker, R. W.（1991）: *Foudations of Cognitive Grammar,* 2, Stanford University Press.
Larrivée, P. et D. Lagorgette（2005）: *Représentations du sens linguistique*, Lincoln Europe.
Leeman-Bouix, D.（1994）: *Grammaire du verbe français,* Nathan.
Le Goffic, P. et F. Lab（2001）: « Le présent « pro futuro » », *Cahiers Chronos,* 7, pp.77-98.
Maingueneau, D.（1999）: *L'Enonciation en linguistique française,* Hachette.
Martin, R.（1983）: *Pour une logique du sens,* Presses Universitaires de France.
Martin, R.（1987）: *Langage et croyance,* Margada.
Morency, P.（2010）: « Enrichissement épistémique du futur », *Cahiers Chronos,* 22, pp.197-214.
Morency, P. et L. de Saussure（2006）: « Remarques sur l'usage interprétatif putatif du futur », *Travaux neuchâtelois de linguistique,* 45, pp.43-70.
南舘英孝（1998）:「Aller + inf. と単純未来」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, p.22-33.
練尾毅（1998）:「近接未来形について」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, p.34-44.
Nef, F.（1986）: *Sémantique de la référence temporelle en français moderne,* Peter Lang.
Novakova, I.（2001）: *Sémantique du futur,* L'Harmattan.
小熊和郎（1993）:「〈トコロダ〉と aller, venir de, être en train de ＋ infinitif」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』29, pp.139-175.
Osipov, V.（1974）: « Grammaticalité au futur antérieur », *Le Français Moderne,* 42, 1, pp.20-33
Perret, M.（1994）: *L'énonciation en grammaire du texte,* Nathan.
Rocci, A.（2000）: « L'interprétation épistémique du futur en italien et en français », *Cahiers de linguistique française,* 22, pp.241-274.
Rotgé, W.（1995）: « Temps et modalité », *Modèles linguistiques,* 31, pp.111-129.
佐藤正明（1985）:「Aller + inf. と未来形の機能的差異」『フランス語学研究』19, pp.70 － 80.
佐藤正明（1986）:「未来形と modalité」『東北大学教養部紀要』46, pp.288 － 308.
佐藤正明（1994）:「発話者の個人的評価を表わす前未来」『フランス語学研究』28, pp.1 － 13.
澤田治美（2006）:『モダリティ』開拓社.（とくに第 18 章「未来性からモダリティへ」）
Schogt, H. G.（1968）: *Le système verbal du français contemporain,* Mouton.
Söll, L.（1983）: « De la concurrence du futur simple et le futur proche en français moderne », Hausmann, F. J.（éd.）: *Etudes de grammaire française descriptive,* Julius Groos, pp.16-24.
Squartini, M.（2001）: « The internal structure of evidentiality in Romance », *Studies in Lnaguage,* 25, 2, pp.297-334.

Squartini, M.（2004）: « Il Futuro e il Condizionale nelle lingue romanze », *Revue Romane,* 39, 1, pp.68-96.
Squartini, M.（2008）: « Lexical vs. grammatical evidentiality in French and Italian », *Linguistics,* 46, 5, pp.917-947.
Stage, L.（2002）: « Les modalités épistémique et déontique dans les énoncés au futur（simple et composé）», *Revue Romane,* 37, 1, pp.44-66.
Stage, L.（2003）: « Les valeurs modales du futur et du présent », M. Birkelund *et alii*（éds.）: *Aspects de la modalité,* Niemeyer, pp.203-216.
Sthioul, B.（1998）: « Temps verbaux et point de vue », J. Moeschler（dir.）: *Les temps de l'événement,* Kimé, pp.197-220.
Sten, H.（1952）: *Les temps du verbe fini*（*indicatif*）*en français moderne,* Munksgaard.
住井清高（1993）:「前未来形の時間的用法に関する覚え書き」『千葉大学フランス文学研究』4, pp.13-31.
Sundell, L.-G.（1991）: *Le temps futur en français moderne,* Acta Universitatis Upsaliensis.
Sundell, L.-G.（2003）: « Le futur modal revisité », M. Birkelund et elii（éds.）: *Aspects de la modalité,* Niemeyer, pp.217-227.
田中善英（2006）:『フランス語における複合時制の文法』早美出版社.
Touratier, Chr.（1996）: *Le système verbal français,* Colin.
Vet, C.（1981）: « La notion de « monde possible » et le système temporel et aspectuel du français », *Langages,* 64, pp.109-124.
Vet, C.（2003）: « Attitude, vérité et grammaticalisation : le cas du futur simple », M. Birkelund *et alii*（éds.）: *Aspects de la modalité,* Niemeyer, pp.229-239.
Vetters, C.（2001）: « Le conditionnel : ultérieur du non-actuel », P. Dendale et L. Tasmowski（éds.）: *Le conditionnel en français,* Université de Metz, pp.169-207.
Wada, N.（2001）: *Interpreting English Tenses : A Compositional Approach,* Kaitakusha.
和田尚明（2006）:「過去分詞形の時制解釈のメカニズム」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）50, pp.85-128
和田尚明（2010）:「現在完了形の表す意味範囲の変遷とC-牽引：英蘭語比較研究」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）58, pp.75-112.
Wada, N.（2011）: « On the Mechanism of Temporal Interpretation of *Will*-Sentences », *Tsukuba English Studies,* 29, pp.37-62.
渡邊淳也（2004）:『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社.
渡邊淳也（2005）「Non seulement について」『玉川大学文学部論叢』45, pp.81-96.
Watanabe, J.（2006 a）: « Addition quantitative, addition qualitative et la locution *non seulement* », J. Kawaguchi et alii（éds.）: *Cognition et émotion dans le langage,* 慶應義塾大学（21 世紀COE 心の統合的研究センター）, pp.191-205.
渡邊淳也（2006 b）:「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）50, pp.41-84.
渡邊淳也（2007 a）:「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
渡邊淳也（2007 b）:「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）52, pp.151-175.

渡邊淳也（2008）:「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）54, pp.15-44.
渡邊淳也（2009 a）:「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43, pp.77-83.
渡邊淳也（2009 b）:「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の綜合化・文法化について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）55, pp.123-144.
渡邊淳也（2010 a）:「拘束的用法の devoir, falloir の否定の多義性について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）57, pp.25-41.
渡邊淳也（2010 b）:「フランス語と日本語における留保マーカーについて」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）58, pp.55-74.
渡邊淳也（2011 a）:「ステレオタイプ理論をめぐって」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
渡邊淳也（2011 b）:「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）60, pp.121-181.
渡邊淳也（2012 a）:「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）61, pp.191-234.
Watanabe, J.（2012 b）: « L'auxiliaire *sooda* est-il un marqueur de l'ouï-dire ? », Aoki, S., F. Dhorne et D. Lebaud（éds.）: *Conflits et Interprétations,* dans la revue électronique *Inter Faculty,* 3, pp.228-240.
渡邊淳也（2012 c）:「Toujoursと「やはり」, ステレオタイプ再確認型の副詞」喜田浩平（編）『川口順二教授退職記念論文集』（慶應義塾大学）, pp.178-185.
渡邊淳也（2013 a）:「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）62, pp.69-106.
渡邊淳也（2013 b）:「主語不一致ジェロンディフについて」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）63, pp.95-178.
渡邊淳也（2014 a）:『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社.
Watanabe, J.（2014 b）: « Les termes d'auto-désignation en japonais », *Studies in Foreign Language Teaching*（筑波大学）36, pp.38-46.
渡邊淳也（2014 c）:「いわゆる伝聞の「そうだ」について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）64, pp.19-39.
渡邊淳也（2014 d）:「叙想的時制, 叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝・東郷雄二（編）『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房, pp.177-213.
渡邊淳也（2014 e）:「En attendantについて」『フランス語学研究』48, pp.85-93.
Watanabe, J.（à paraître）: « Gérondif « non-coréférentiel » », *Actes du colloque « La transgression : de l'émancipation à la progression* », dans la revue *Voix plurielles.*
Weinrich, H.（1964）: *Tempus,* Kohlhammer.
Wilmet, M.（1976）: *Etudes de morpho-syntaxe verbale,* Klincksieck.
Wilmet, M.（1997）: *Grammaire critique du français,* Hachette.